

「キンモクセイの木の下で (2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

日本のキンモクセイはもともと国土に自生していたものではなく、大陸から移植されたものが多い。東京の街中にもキンモクセイは多いが、あれだけ一斉に花を咲かせるのに、実がなっているのをほとんど見たことがない。実は東京に限らず、全国的な現象だ。これは、日本に植えられているキンモクセイが、ほぼ 100%「雄株」というのが理由だ。雌株よりも雄株のほうが、花の見た目、量、香りがずっと上だからだ。



お茶の水女子大学のキンモクセイも、すべて「雄株」なので、毎年これだけ大量に咲くのに、一度も実がなっているのを見たことがない。



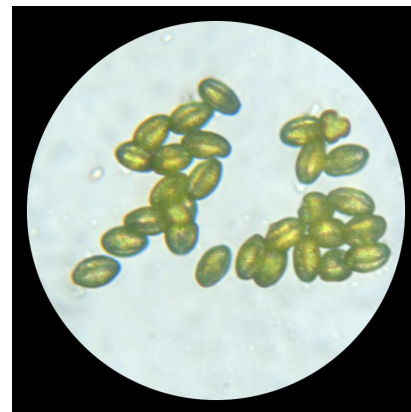
雌株にはちゃんと実がなる。教育的な観点からは、是非本学にも「キンモクセイの雌株」を植えてほしいと思っているのだが、残念だ。写真は池袋の立教大学通りの街路樹で見られるものである。(A 氏撮影)



写真は「キンモクセイの実」である。数年前の初秋に、3年生の子どもが学校に持参してくれたものだ。「オリーブの実」によく似ている。キンモクセイもオリーブも、同じ仲間(モクセイ科、オリーブ連 *Oleaceae*)に属するのだ。



キンモクセイの花はいろいろと役に立つ。園児や低学年児童は、袋に集めて水を入れて、大喜びで香を楽しんでいる。5年生の花の学習では、花粉の観察にも



使える。何しろ、何十万輪と咲いて、すべて「雄花」なのだから、花粉もほとんど無尽蔵だ。写真はキンモクセイ花粉の4頭顕微鏡画像である。

(透過光×400)